

わけでございます。

## グリコン戦友愛

熊本県 坂井幸弘

私は陸軍航空士官学校の予科に十八年三月に入って、十九年三月に本科に入って、今の埼玉県入間市に学校があったものですから、航空自衛隊関係の情報センターだったと思うんですが、そこが学校で東京の空襲とかでこっちないものですから、教育のために満州に渡った。当時、満州には四百ぐらい飛行場があって、ほとんどが空きの状態でしたから。四月十五日に渡満して、当時、日本海側に出て、日本海はアメリカの潜水艦がいるというので高岡あたりで二、三日民宿して、物すごく天候の荒れた日に船に乗って、四月二十八日に東満のキョウギ飛行場に着きました。そこで教育を受けました。ソ連が参戦した八月九日は、グラマンが飛行場の上にもしよっちゅう飛んできて、私たちをからかいなが

ら、ウラジオの方に帰っていったんですが、学校からは、おまえたちはとにかく戦争を続けんと。四平に集結ということで汽車でチャムスの方をぐるっと回りながら、あっちこっち鉄砲の音、大砲の音がするという中で、ちようどチャムスあたり、中国から親を捜しに来ていませぬ。ああいう人たちの姿をよく見ながら、ちようど軍用列車だったもので乗せることもできずに。ハルビンで汽車がとまってしもうたですものね。ハルビンの郊外のサンカに飛行場があったから、そこで終戦を教えられたです。それから、また汽車が敦化の方に移動して、敦化の方で天幕生活とか、学校に泊まった。まだ当時はソ連軍も入ってなかったから、軍刀を持っておったですけん。銃を取り上げられたあとそういう状態で、あっちこっち転々とテント生活とか、泊まって歩いて、東北でしばらく生活しました。そして、敦化にいるとき、いろんな兵隊が千人単位ぐらいで、ここからこままでがどうだというのをソ連が決めたとき、二百四十五大隊に編入されたということです。

そして、二十年十月十日ごろ、日本に帰るから汽車に

乗れということ、汽車が牡丹江からしか出ないということ、敦化から五百五十キロ離れた牡丹江の駅まで一週間くらい行軍させられましたものね。そのとき、食糧の配給は全然ないし、それで私は休憩時間に畑のカボチャを生で食べたり、食べ残しのトウモロコシみたいなものを食べたりして下痢なんかして、ほとんど体力を消耗し尽くした死の行軍みたいなものでした。これはもう全部がそうだった。ここでの行軍中に見たのは、日本の兵隊の死体が、ちょうど夏のかんかん照りで、道路にひかれていて転がって、頭がべしゃんこになっているとですね。そこをよける気力、体力もなく、何を踏みつけて歩いてきたかなと思うぐらいの厳しい行軍でした。

十月の末に、牡丹江から有がい貨車に乗りました。そこでソ連へ入ったんです。私の記憶では汽車に何日乗ったかというのはようわからんですが、恐らく一週間以上かかってタイセット地区の五十六キロ地点におろされた。ちょうどバイカル湖が見えてからバイカル湖が見えなくなるまで三日ぐらい汽車がとまったりして、当時、今考えてみると満州にあった日本の生産施設の、工場の

機械とかああいうのをソ連は根こそぎ持っていったんだね。我々の輸送よりも、工場機械なんかの輸送を先行していたんです。ここで二週間以上かかりましたね。私たちのいたところはイルクーツク州タイセット地区です。後で聞いたところによりますと、そのタイセット地区には大体七万人の抑留者が集結しているんだということ、その任務は鉄道建設が主です。

—— izzogoro着いたんですか。

ここに着いたところは十一月九日、仲間の情報を全部収集して九日とお互いに確認したんです。十一月九日といえば、あの付近は十月の半ばぐらいにちょっと雪が降ったら絶対に解けない。問題は、そこにおりてから、また百二十キロ地点までだから、六十キロか六十キロを三日間かけて歩きましたものね。そのときに道路は凍りついて、日本の軍靴は鉾がついてツルツル滑って転げて、それから途中の食糧配給は貨車の中ではときたま少しずつ何かやっていたんだけれども、ほとんど食糧もなかったから、物々交換でロシア人あたりと少し交換して命をつないだみたいで、フラフラでみんな一生懸命もうろう

として三日間歩きました。晩も泊まるところはほとんど丸太小屋、林の中に建っていて、行った日にまきを集めてきた。たかなければほとんど暖房もない。このとき、まだ残っていた体力もほとんど消耗してしまつたんです。

十一月十二日、私たちが落ち着く先の、私は二十ラーゲル、二十七と二十か、どうも情報によつてはつきりしないんですが、二百四十二大隊がそこを本拠にして、それで見ると大隊長以下そこに着いたんです。そこでは、食糧の配給といえ、とまたまちょうど昔のマッチ箱ぐらいのトウモロコシを練つたようなパンとほんのキビナゴぐらいの大きさの塩魚を四、五匹ぐらいもらつた。その収容所に着いてから寒いから暖房をとるのにまきを集めにいって小さいまきを背中に担いで足がフラフラして、やっとたどり着いた記憶があるだけです。そこではほとんど作業らしい作業も組織的にはしなかつたと思います。

それから、十一月二十五日、その二四二の本隊に二週間ぐらいいて、それからグリコンという国営農場の方

に五十人ぐらいが、本隊から二里ぐらいあつたと思うんですが、そこまで行軍で行つた。そのグリコン農場大隊の中のサガミジロウという京都出身の人が中隊長です。中隊がそのままグリコンに行つた。今、私たちはこうやってグリコンの名簿をしつかりつくられたりなんかしているのは、実はその中に陸士の同期生が九人いたんです。その九人がサガミ隊長を中心にして、私たち九人の中隊長みたいにしています。

グリコンでの生活とか作業ですか、まず私は三つ場所を変わつておりますね。その第一回はグリコンなんですが、そこではどんな作業をしたかという、まず白カバとか松林を切つて農場を拡張する、開墾作業が主です。それから、一部の弱い人はバレイシヨ倉庫なんかに行って、バレイシヨの選別なんかして、それから農場で小麦を刈り取つて、脱穀しなかつたもので、それを脱穀する。それから、よく晴れたらバレイシヨとか雑穀の植えつけをやり、そのころになつてから比較的体力が回復して仕事ができるようになったんです。この最初グリコンに行つてまず困つたのは、寒さで四十度になると日本

人は作業に出すなという基準があるけれども、まき集めなんか我々は着かったから、そういうのは四十度になっても若い者何人かでまき取りにずうっと出ておりました。

それから、ここで開墾なんかするときに、ロシア人といろんなトラブルがあったのは、向こうのあれでは五十分働いて十分休むというのが向こうの就業規則というんですか、まき取りというか労働慣行ですが、日本の当時の服装ではシベリアの三十何度のところに五十分も立っていられる服装ではないんです。もう五分もたったらほとんど作業あたりはできない。例えばツルハシも持てんという状態、それから道具も非常に数はあるけれども、切れないということで、かじやの経験者もいて、ツルハシと鋸の目立てをして切れるようにしたり、それから作業では私もロシア人と一緒に仕事をしたことがあるんですが、休み時間、日に当たる時間を長くして、仕事を十分なら十分でパツとする。パツと休むということをやると仕事は三倍も四倍も働くものですから、ロシア人からもヤポンスキーこすいと言われても、そう言われないうよう

に変えていくよりしようがない。当時はサガミ隊長が中隊長で、私たち独身の候補生の九人が、班長といいますが、小隊長といえますか、そういう組織で、九人の中で交代で週番士官みたいな役割をつくったり、それから作業の隊長みたいなのをしながら生活していた。

グリコンではいろんな目にも遭っているんですが、比較的グリコン会がこれだけ結束して、今に至るまでお互いに懐かしくしているというのは、隊長も立派だったし、何とかみんな生き残ろうじゃないかということでお互いにいろんな知恵を出し合って助け合ってきた。それで当時、サガミさんを中心に、非常にサガミさんを信頼し慕っているということから、グリコンという場所の名前を使った久凜魂会の結成というのもそこから出てきたんです。

それから、グリコンでの生活はいろいろ、シラミの問題とか入浴の問題、それから収容所の建物の問題、いろいろあるんですが、少なくとも対人関係においては、グリコン隊は非常にみんながお互いに助け合いながら続けてきたのが、死亡者も少なかった一番の原因でしょう。

全体が百五十人ぐらいいおるで、そのうち死んだのは二人ですか。本隊は三分の一が死んだと聞いておるです。それから、話を前後しますが、グリコンでの私たちが生き残った一つの原因としては、本隊にはほとんど食糧の配給もなかったんですが、農場に来てから、例えばジャガイモの選別に行ったら、ジャガイモを生で食べるとか、それから、農場の脱穀なんかに行ったら、それをポケットに少し持ってきて、帰ってから炊いて食べたというところで、少しずつ食べ物近くに生活できたから、何とかできたということです。それから、収穫時期には、ロシアの倉庫に入れなければならんバレイショあたりを途中とってきて収容所の中に持ち込んで食べたりしたんです。それから、松林の根っこあたりを掘ってジャガイモを隠したり、いろいろ後のことを考えてそういう悪さもだいぶしたんです。それから農繁期には応援が来ていたんですが、その人たちにも倉庫に入れるジャガイモとかそういうのを掘りに掘り、非常に食うのに困っているものですから、それを少し持ってきて帰ってくれとか、そういう形でほかの方にも農場の収穫物もできるだけ、何とか

いますか、持って帰れるように私たちも精いっぱいのことをしておったです。

それから、当時もシラミとかそういうのは数限りなく、ひどい者は自分の下着の縫い目にズラツと並んでいて、よく晩に衣類を全部外に出して、凍らせて死なせよったんです。後からは、入浴といいますが、ああいう蒸しぶろに入るときに、衣類を全部滅菌装置で白カバのまきをたいて、その熱風で滅菌して、蒸しぶろに入っていて、そうしたら非常に衛生的にも少しよくなってきました。たしかに一週間に一遍ぐらいそういう蒸しぶろに入っていたと思うんです。グリコンではそうやって、私の記憶では二十二年の春ごろまでグリコンに生活していたんですが、グリコンの生活は農繁期をべんやれば、食い物をいろいろところで流したり、いろんな工面をしていたりしたから、我々のおったグリコンの周辺の人は非常に命びろいした一番の原因ではないかな。これはもうサガミ中隊長と特に私も元氣やったから、よく話合せて、そういうときに週番士官になって食い物を隠す役割をしていたんです。

それから、時期ははっきりしないんですが、二十二年

になったら、今度は道路づくりの仕事が出てきたんです。向こうはほとんど冬は凍って通れるけれども、春先になると解けてしむ危険があるものですから、そこに丸太を並べて道路をつくる。これがかなり長く続きます。それで、この道路をつくりながら、逐次奥に奥にと入っていったんですが、周辺のモミ材とか松材、そういうのを大きな二十センチから十四、五センチぐらいの板にして並べて四メートル幅ぐらいにして道路工事を続けながら、次に行ったのが地図で見れば百五十キロ地点前後じゃなかったかなと思うんです。そこに行つて、天幕生活にまた入つて、新しい、これからは本来の本隊の任務である鉄道の工事に入つたわけです。鉄道の工事もしながら、収容所も設備も十分整っていなかったものから、最初は天幕の生活をしましたが、のちに全部丸太につくりかえて、今の丸太積み山の家のみたいな形で全部つくつたんです。一つの宿舎に恐らく二百人前後入つて、一つの建物の単位を中隊組織にして、ここに多いときには千人近くが住んでいたのではないかなと思ひ

ます。

それでまだ道路工事とか鉄道工事の関連ははっきりしないんですが、かなり収容所から離れたところに作業に行つて、ここを掘れと言われたときに、凍った土を掘らせられて、コンクリートを割るよりもっと大変ですものね。だから、付近からまきをいっぱい集めてきて、たき火をしてやわらかくして掘つたんです。何をつくつていいのか自分たちも意味がわからなくて、春になると解ければ、松で板をつくつて、その上を一輪車、今、鉄の心棒があれば、それをヤスリで削つてターチカをつくつて、それで運んだ。そういう作業がかなり長く続いたです。当時、凍った土を掘るのが物すごく遅いものですから、ロシア人もイライラしていたようです。

ちようど民主運動もそのころからポツポツ出て、青年行動隊というのを設立して、私は初代の行動隊長にさせられて、四十人ぐらいでしょうか、その作業ノルマを遂行するために頑張つたというんでしょうか、やったことがあるんです。そのときに、私は平均体重六十三キロ前後ありますが、このときは恐らく四十八キロまで落ちてい

たんではないかと思うんです。ですから、そういう意味でノルマを少しずつ上げにやあらんです。結局、仕事の意味がわからんから、日本人にここはどうするんだということを話せば、日本人はもつと知恵多く仕事するんですね。ここ掘れ式だもんですから。言われたとおりにするもんだから、能率は上がりません。今度ロシアの方もそれを発破で吹っ飛ばそうということで、鉄の棒を焼いて少しずつ打ち込みながら、二メートル以下ぐらいの土を掘るのに、それぞれ二メートルとか一メートル間隔に掘って、赤く焼いた鉄棒を仕込んで、それに入れてかき回して、少しずつ奥に奥にと連れていって、火薬を入れて爆破する。それから、ロシアの女の発破係もいて、発破の火つけあたりは一ぺんに、例えば五十穴を掘って、火をつけて爆発するときにはもうおっかなびっくりで、命からがら火をつけたことも何度かあるんです。それから、山が今度は深くなると、井戸みたいに縦穴を深く掘ってやるので、なかなか大変だから、てこの応用を使って、井戸の水を汲むように掘った。今考えるとあのロープなんかどういふのを使っていたかよう記憶にない

んですが、竹かごみたいなのをつくって、その中に人間を入れて十二、三メートル掘ったと思うんです。それから横穴を全部八メートルぐらい掘って、そこに火薬を入れて一ぺんに二、三キロ離れているところからボタンを押して山を吹っ飛ばすんです。そういう作業をかなり長期間、三交代で三人がそこに従事していた。

—— そんなに深く掘って何しよっと。

結局、ここで鉄道を通すとき、山がじゃまになると、そこにトンネルを掘らないかんもんですから、そこをちよっと通すためですね。そしてふっ飛ばした泥を今度は運び出して、そのあとを鉄道の地盤に。

—— 山を崩しちゃったんですね。

コンクリ作業の山の中で、そこに何メートルという厚いコンクリの土台なんかもだいたいぶやりましたものね。コンクリだから、冬だからやめると凍ってしまうから三交代。収容所から三キロ離れていたと思うんですが、そういうときなんかよく意味がわからなくて、何かをつくるんだという話はうすうすわかっていたんですが、あとは結局、その一連の関係の一部だったわけです。そのころ

になると今度は、ロシア人もいろんな作業用の、例えば泥の運搬にもターチカという手で運ぶんじゃないくて、タラップを使うようになって能率も大分上がるようになったわけです。ただ当時も、考えてみると、食い物は十分になかったという証拠には、雑炊みたくのを、パンは、半分は昼に弁当にもっていけというのに、ほとんどの者は食い出したらとまらんですから、全部食ってしまおうたですね。作業所に行ってから、気候によっては生えているキノコをとるとか、ヨモギとか、春先には草の新芽みたいなのをつんで、そういうのをたいて食べてきたと思います。あとの食い物はないのですから。ほとんど「食いぺんに。」

—— いくらかようになったというのは、いつのことですか。

二十二年じゃなかったんでしょうか。二十二年の秋ぐらいになってから。二十三年ぐらいになったら、少し金をくれるて。中隊単位ぐらいにきたことがありますものね。それまでは、ロシア人自身が収穫できんから、こういうずっと田舎の方にたどり着く間に食い物なんかかも

途中でうなつてもうてですね。その証拠にはロシアの偉い人が見にくるというと、食い物が全然違いましたものね。だから、ロシアの偉い人が監視に来るとうときは、私たちは物すごい喜んだ。四十度になったら作業に出ていかんていいとか、食い物がよくなるので。

それで、そういう作業をするうちにも、死んだ私の部下でトラックのステップに乗りこなつてひかれて死んで、私もそのときは、指揮官の監督不十分で懲罰を受けたことがあるんですが、体罰はくわなかったですね。そのころはロシア人のつき合いが相当。グリコンでもロシア人とうまくつき合つた。

ただ一つ、この鉄道工事のところで、途中でいわゆる民主化運動というのがいろいろ出てきて、これとの複雑な人間関係が生じ始めたのはこれからです。日本人の共産教育でどこかに連れていっていたのが来て、それが委員になって民主運動を起こすとか。私も当時は陸士の九人というのは、軍国主義の教育を受けたものですから、グリコン農場にいるときには、グリコンの名をもじって、久しく凜々しい魂ということで、これは昔、大

阪で弁護士をしていた人で、死んだんですけれども、これが主宰で、「久凜魂」というのを、新聞紙に書いて、みんなに回して読ませたり、壁に張ったりしたんですが、この収容所あたりから本当のロシアの民主運動があった、いろんな日本新聞も、私たちが初めてそういうのもあったかというのを知ったし、たばこも何とか手に入るようになったのは二十三年、二十二年の夏ごろからだったと思うんです。

民主運動が盛んになって、私のところのリーダーというのは物すごく厳しくて、主義というのには左にかたよっていたものですから、私はそのときは、一つの生活単位の建物の責任者に。そのころ将校を途中で廃止して、選挙で決めようということになって、私も選挙で中隊長格にさせられて、民主運動の方とそういう委員会と一緒にあって、経営幹部会というのを二番目の収容所ではつくって、私どもその会員であったんですが、民主運動の責任者ともめて、結果的には、私はひどいつるし上げをくったこともあります。

ここの鉄道工事は、私たち路盤の土をどけてつくる。

ただ石がないものですから、枕木の製材のきたのをそれに並べて線路を敷いて汽車を通すんですが、下が凍っているうちには何とか汽車が通っても、春になると、汽車の振動で枕木がずうっと泥の中にめり込んで、脱線とかそういうのは数知れずあった。それから、そういう勾配なんか急で、わしらが積んだ枕木の上を上りきらず、途中であと戻りする。次の車両が来て、それにぶつかって大変な事故を。ソ連人は死んだけれども、日本人はその汽車の枕木のそばにいなかったから、死んだことないけど、そういう作業にだいが行つた。それから、まきをたいて汽車が行くものですから、まきの飛び火で、付近の山がよく山火事になったり、いろいろ体験しました。

脱線なんかしたときには、私たち機関車が重なっている下にもぐり込んでいろいろした作業なんか、今思うとぞっとするような危険なことをだいがこでもやりましてね。当時は日本の状態もわからないし、私たちはこうして死ぬというのをそう意識せずに、日本に、懐かしいけれども、帰るのが逆に恐いみたいな感覚にあとから不

思議に思っていたです。それから、鉄道を通して、汽車が通るようになってから、私はまたそれから二里ぐらい離れていたと思うんですが、また次の作業隊に行つて、そこに行つてからは、私らがつくった線路に汽車が通るように、今でいう日本で保線の仕事です。枕木を入れたり石を入れたり。あそこで二十四年やったと思うんですが、仕事も忙しくなつて、ロシア人の囚人を入れるといふので収容所を頑丈につくつてあげた。例えば掘とか板を張るとか、とにかく作業が忙しくなつて、私はそのときには、最後の収容所では、当時行つたときには、作業の小隊長みたいにして、作業をみんなに指揮したりなんかしていました。途中から何か大隊長になつたんです。帰る間際です。いろんなロシア人との間に入りながら、前にいた収容所に何か資材取りに、ロシアの責任者が自分の前について、あそこから資材を取つてこいと言つたので行つたときには、もう前の収容所にはだれもおらんかったですよね。ただ、ソ連兵が帰つたのかどうかわかりませんが、最後の収容所は、このころから、実は二番目の昭和二十二年ぐらいに一部の弱い人を帰す

ということ、だれを帰すかというのを幹部会で決めたんです。私も、実は、当時は選挙制で私が中隊長で、私の知っている人間が中隊の内部のいろんな世話をする副官みたいな仕事の関係で、一緒にしよつた関係で、彼が手紙出して、それは二十二年。返事が来たという事は、家に連絡したからです。あとは、若干記録はあるが、だれも紙一枚、写真一枚持たせなかつたからね。そういうもので、最後は結局二十四年の夏ごろだったでしょうね。もう暑くなつたころ、帰すぞというときも、私たちのところで八十人残してほかの収容所に引き継ぎ、あとは全部帰るということで、私も最後まで残るうとしたけれども、収容所の関係で帰れということ、帰つたんです。私は向こうを何人出たかわかりませんが、ナホトカに集結して、そのころも民主運動がでんぐり返したりなんかして私をつるし上げたのが、ナホトカへ来たら今度はつるし上げをくいおつて、民主運動が主導権争いでこうなつた。私をつるし上げたのは佐久間という、帰つたころはどこかで炭労の委員長をしているという話だったんです。これからひどい目に遭わせられた

日本人は多かったです。それもまたナホトカではひどい目に遭っておったです。遠州丸にナホトカから乗って、二十四年八月二十八日舞鶴着いたら、ソ連で何ばしとったかとか、いろんなアメリカのFBIからの調査みたいのが毎日のように来た。そして舞鶴へ帰ってきたら、時の市長がいさつにきて、役所に入ったところが、シベリア上がりということで首を切られたりなんかして、二年ぐらいまともな仕事ができなかったです。当時、わしは土地が少しあって百姓したり、農機具の売り買いみたいなことをして二年ぐらい過ぎましたかね。当時の私の小学校時代の知り合いが役所の議員をしておって、その人のおかげで役所に入りました。

それから、シベリアあたりではしばらく、ちょうど二十四年八月といえば、一番共産思想というんですか、あいうソ連での民主教育を受けた者の集中していた時代ですものね。それで帰ってきてからも、いろいろ苦労とか、巡査から、あなた何していると聞かれたり、つらいことは数限りなかったとです。

—— 鉄道をつくられるときには、だんだん鉄道が延

びていくわけですが、その場合は収容所はどこかへ移動していくわけですか。

そうです。

—— 総延長で何キロぐらい。

大体、当時ソ連のロシア人の監督なんかの話では三百キロです。それで、この国は石炭とか鉄とかガスなんかが無尽蔵にあるんだということを言っておりました。私たちが五十六キロ地点でおりましたということも知っておりますが、その五十六キロぐらいロシア人が自分たちの手でつくっているわけです。私は学生時代に知ったのは、バム鉄道というのは、シベリア鉄道はずうっと国境に近くて、戦争になったら攻撃されやすいから、その奥へもう一本通す鉄道です。それがロシアの計画の地図に載っていたんです。それがロシア人が結局戦争とか何かで五十六キロしかつくっていませんでした。恐らくこの私たちがつくった道路、鉄道というのは、今日本の技術者とか日本のいろんな会社も一緒になって、一生懸命開発しているんでしょう。

それから、日本人がいろんなところで死んでいるんで

すけれども、まず私の着いたころ、栄養失調でバタバタ死んだのは、下が凍っているから墓穴を掘るのに掘れんです。それで、まきをたいて少し掘ってみたり、こっちも体力がないから浅くしか掘れんということで、死んだ者をそこに積んでおったですばい。一つの穴に死んだ者を全部たばねて、後から寒いもんだからポリポリ掘って、積み重ねていったという話はみんなから聞きよったですが、私はその現場に立ち会っておったということもないし。あまりロシア人もそういう始末を見せなかったと思うんです。それから次の二十七収容所でも、作業中にダンプの輪に敷かれてべしゃんこになっているわけ。それなんかもそういったことで、どこへ持っていっていったか、それを私は収容所において葬式をした記憶は全然ありません。

—— 私たちがおったところでは、それぞれ死んだのがおっても、恐らくそういう墓なんかのあとはないと思うんです。

そうですね。山の中にいったのは、どこにあるのかほとんどわからないです。

—— よほど収容所の近くとか何とかで、その収容所がここにあったというのがはっきりしていれば別ですけどね。

できたらそういうところが見れば見に行こうやないかということですか。

—— 鉄道の建設は、夏だけでなくて、冬も続いていたということですか。

そうですね。冬は、結局下が凍っているものですから、仕事がほとんどはかいかんですね。最初は体力がないから、例えば開墾のときなんか本当にみじめだったのは、まず日本の防寒服、中に毛がはいっていても、下は皮の靴、もう凍りついた土の上は滑って歩けんんです。それから冷たくて。行った冬は防寒外套の中に毛が入っているけれども、上は毛がとれたら、どうもならぬ。二年目ぐらいになったら、下はフェルトの靴になったが、穴があきおるのは毛布を張りつけたりして。春になってから少し行動もできるようになったし。

—— 何人ぐらいでバム鉄道の建設に参加しておられたですか。

この地区に、とにかく総数七万。

—— 一斉に並べて。

それが大体千人単位ぐらいの一個大隊をここからここまでとって千人並べて切るわけです。それで、お互いにシベリアに行ったけれども、帰ってから仲間同士このだれやったということがわからんのは、例えば、帰る途中で、消毒のため、全部持っているのは、外に置いて消毒室に入った。するとロシア人が持っていくわけですから。ただ、私のところのこの名簿ができた根拠というのは、サガミジロウという人が将校だったから、紙を持っていて名前を書き込んでいった。私も帰ってから、その人とか何人か知っておったから、何人かの記憶をたどりながら手紙を出しておったんです。いつとか、作業とか、どこの収容所に泊まっていたかというて。そして自然にどこにだれがおる、どこにだれがおるばいうことで、最近になって名簿らしい名簿が五十年してやっとできるようになった。

シベリアに行ったら、まず食い物のことがどうしても命をつなぐための大事なのですが、ソ連に着いた当

時、ソ連はほとんど配給物資なんか届かないもので、そのとき、ほとんどぎりぎりまで体力を消耗してやったですものね。だから、やつぱりちょっと春になって、青草が出ると、これは食われるだ、あれは食われるだでみんなで物色して、昼はもうそういうのをつみとって食うことが楽しみに。雑穀のし残しみたものをかき集めて、みんなで食べよった。夏はそれらしい食い物が何とかその辺にあったから。笑い話みたいなものですが、私たちの農場で、日本の大根と違って向こうは三角みたいにして、てん菜とも違うんです、日本の野菜大根とてん菜大根の中間みたいな大根を毎日食べて、十トンぐらいの山を三つぐらいつくって、それに草刈りして、泥をかぶせて、全部冬の間に、収穫してから開うたんです。

それから、木に下げにいくとか、あそこに大根があるから取ってこいといって、取りに行って昼はその大根を焼いて食うとかいうことで、春になってロシア人が大根を取りにいったら、いっちゃんもなかったという。三十トンの大根を食うてしもうたです。そういうのが私たちの命つなぎになったこととして。一番はじめに感じたの

は、まだ本隊にいて、ロシア人なんかがちり場に捨ててあったキャベツのしんをみんな取りに行つて指揮官に怒鳴られおったけども、もうとまらんじゃったです。日本人だったら、キャベツだったら、丸いところと根は切るばつてん。ロシア人はみんなこうして切つとですよ。あのしんの根っこにちゃんと白いのがくつついている。もうああいうのが本場に情けなく、またそう言つても、これで命をつなぐしかないと思つとです。

—— 本隊の方はどのぐらい死亡したとですか。

三分の一とです。千人の中で三百人近く死んだ。

—— やっぱりそれも栄養失調でしたね。

ほとんど栄養失調でした。

—— 主として最初の年でしよう。

最初の年です。二年度からそういう寒さに対して、例えばワースリンキというソ連の靴をロシア人が持つてきたり、食い物なんかも少しずつよくなつたとです。それから、日本人は工面がいいから、来年の冬は過ごさんなんていつて、夏のうち、貯蔵をするでしよう。やっぱり着いた冬だけはもうどうもしようがなかつたで

すね。二年目の冬ぐらいいつたですか、私は直接その場でタッチしていなかつたですが、日本人が、一人は衛生関係なので、二人脱走して、あまり遠くに行かんうちに、一人は殺してかなんか、その肉を焼いて食うたというて、そのまま銃殺されて。

—— 何を食いよつたですか。

仲間二人で逃げて、一人を殺したのか死んだのか、その仲間の肉を食いよつた。ロシアの兵隊に銃殺されて、これはみんな私のいたところは知つとるです。私は、ただその現場に立ち会つたわけでもないです。ほとんど死んだ者の始末は、日本人が手がけているような気がするんです。私もいろんなことをやつたけれども、それだけは、死んだ者の始末だけは全然しなかつた。

—— 鉄道を通すということは山の中だったんですか。ツンドラ地帯ですか。

山に。向こうの山は険しか山ではなくて、平たか。

—— 小高い山です。そして、作業はやっぱり朝八時から夕方五時まで。夜間作業はなかつたわけですね。

鉄道工事で、例えばコンクリをする、三交代だったで

すね。

—— 冬なんかも三交代あったですか。

はい。

—— 夜勤の場合は、きついですよね。

それと、晩なんかは、山の結局あぜ道を変えるのが大変で、余談になりますが、私はその作業所の近くに分遣隊の宿舎をつくるけん、場所を選んでこいということで、山を登って真っすぐ行くと、ロシア人が、作業隊が木を切っていて、作業隊のいる場所を通っていくと、その付近で一人斧を腰にさして、見に行つて、途中気色が悪うなつて逃げて帰つた記憶がありますものね。何か人間の足みたいに、毛いっぱいのを白カバに突きさしてあるのを見て。それであとで何人か連れて自分たちの宿舎をつくつた。それから、三交代の場合、ロシアの監督が三人いるんですが、女の監督なんかも来ていて、もう恐ろしがつて、例えば、日本は日本人同士で仕事をする、ロシアはロシア人同士で帰ろうとすると、バンドでひつつかまえて、待つとけ待つとけと。三キロも四キロもあつたでしょうか。三キロも離れたところへずうつと行

きよつた。

—— そうすると一時間ぐらい前に持つていかにやらんでしよう。八時からだつたら七時ごろ出なきやいかんとか。

それはそんなに早う出んじやつたですね。帰りは遅かつたが。ただ、冬は明るくなる時間が本当に三時間しかないでしょう。そうすると、朝飯を例えば七時なら七時におかゆみたいなのを食うと、少しうたうた眠くなつて、作業を休みになつたらすぐに寝てしまふんですね。

そうすると、作業に出発後、何というか、ラッパの音を夢うつつに聞きながら歩いていくと、もうろうとしてやっぱり歩いているですもんね。寒いときには、夜明けとかによう凍傷になつて、私たちも鼻の頭なんか、カチンカチンになつたと思うんですが、食事していて相手の顔見て、おい凍傷や言つて、みんなで一生懸命もんだもんです。日本では考えられんようなところですね。

—— やたらと鉄道線路に沿つて病院と製材所があるわけですけれども、製材所は枕木をつくつたでしたか。そうです。あとから建築材も若干、床板とかああい

のが出てきたじやろうと思うんですが、最初の二年ぐらい全部赤松なんかを斧でずうっと印をつけて、くさびをつけて目をきれいにしして、結局、丸太を二つに割った板しかなかったですものね。屋根裏でも何でも床でもそれを使って、私たちも枕木には製材をずうっと並べたけれども、建築材には私たちはほとんど板を使った記憶はないです。製材所なんかもこんなにたくさんあって、本当にあったらどうかと思うぐらいです。これは恐らくこういうのはだいぶあとからできたと思います。

—— 枕木の場合は、材料は松ですか。

松の中で赤松、エゾ松、モミの木、白カバぐらい。あとの木はなかもんですから、建築材料は木は赤松が主です。道路に並べるのはモミの木やったですね。それから、道路工事では、秋ぐらいになると、付近のやぶに行くと、キノコがいっぱいあって、朝、昼飯まで食べてしまおうて、そのキノコを昼は炊いて食べておったです。それから、向こうには枝が長い五葉松の、二十メートルも三十メートルも高くなるんですが、そういう木を切り倒して、上に松の実がなっていると、落花生みたいな実があるんで

すよね。それをとるために木を切りよったです。それも食い物欲しさに松の木を切り倒したとです。その中に落花生みたいのが何粒あるかですね。それを食べるのが生きがいだったんです。

—— 特にこういうことがあったということとはございませんか。

向こうではいろんなことがあり過ぎているんですが、私が非常に困ったのは、農場で栄養失調に近いのは何十人かあって、それに軍医さんがいないということで、私も一ぺん、かなりロシアの監督と仲よくなっていたけど、おれに少しジャガイモをくると言って、ジャガイモを担いでいくと、つかまって、ゲーペーウということで、物すごくひどい目に遭ったことがあります。それから、ずうっと離れたところに、牛とか馬に食わせるいわゆる乾草、草なんかを山にしておりますね。ああいう作業に行つて、その作業のときに、近くの国営農場に小麦の山があったから、例えば三時にそこに行くから、一人か二人か、一人で寂しくて二人。雨がっぱを持って行って、小麦の袋をちょっと踏むかたたくかすると、五、六合の

小麦がすぐ手に入る。昼はだれしも食うてしもうてないので、それを炊いて食わせるとなると、みんなが物すごい勢いがつくものですから、それを取って、それはロシアの国宮農場の者に捕まって、まだそのころはそれが帰らんと。それでこういう名簿まで調べるのは、なかなかシベリアに抑留された者の場合は無理ですものね。

—— 久凜魂会というのは戦友会でしょう。  
そうです。

—— これは、グリコンにおられた人たちが。戦友会は何名ですか。

今、向こうでしておるのは百人前後で、ここにもよそこから応援に来たり、入ったり出たりという関係で、その中で死んでいるのがもう三十人ぐらいいらっしゃるでしょうかね。

—— 会長さんはどのあたりですか。

これは、クラウチジロウという人。この人は人格的にもよかったし、ロシア人がやかましくいう中でもうまくそれを運営したから、この人に対する部下の信頼というのは物すごくありまして、この人をほかしたのが、我々

若手がけにおったということです。

—— 当時、将校でしょう。

少尉ですね。

—— これはいつごろから始まったんですか。

—— ことして、二年おきですんで、第六回ですものね。

—— 十二年前ですね。五十二、三年ごろですかね。

大阪周辺とか関東周辺に一緒におったもので、どうしてもあの付近が中心になってですね。

—— 二年おき。

今度、ちょうど四十人ぐらい仙台に行きよったですが、もう先がないから毎年やるかと、来年から毎年ということで。九州の仲間がちょうど十人ぐらいおるんですが、それを全国は二年おきにするから、その間の年に九州でやろうということで、一回目を柳川でやって、二回目を宮崎支部でやって、ことしが福岡の番じゃったですね。私らが仙台に行ったときに、早う病氣してもう危ないというが来ているので、毎年やることにしたとです。

—— 帰還されたのは二十四年の。

八月二十八日です。